

# お母さんから子どもが出てるよ (イチゴ)

北陵幼稚園(島根県簸川郡)

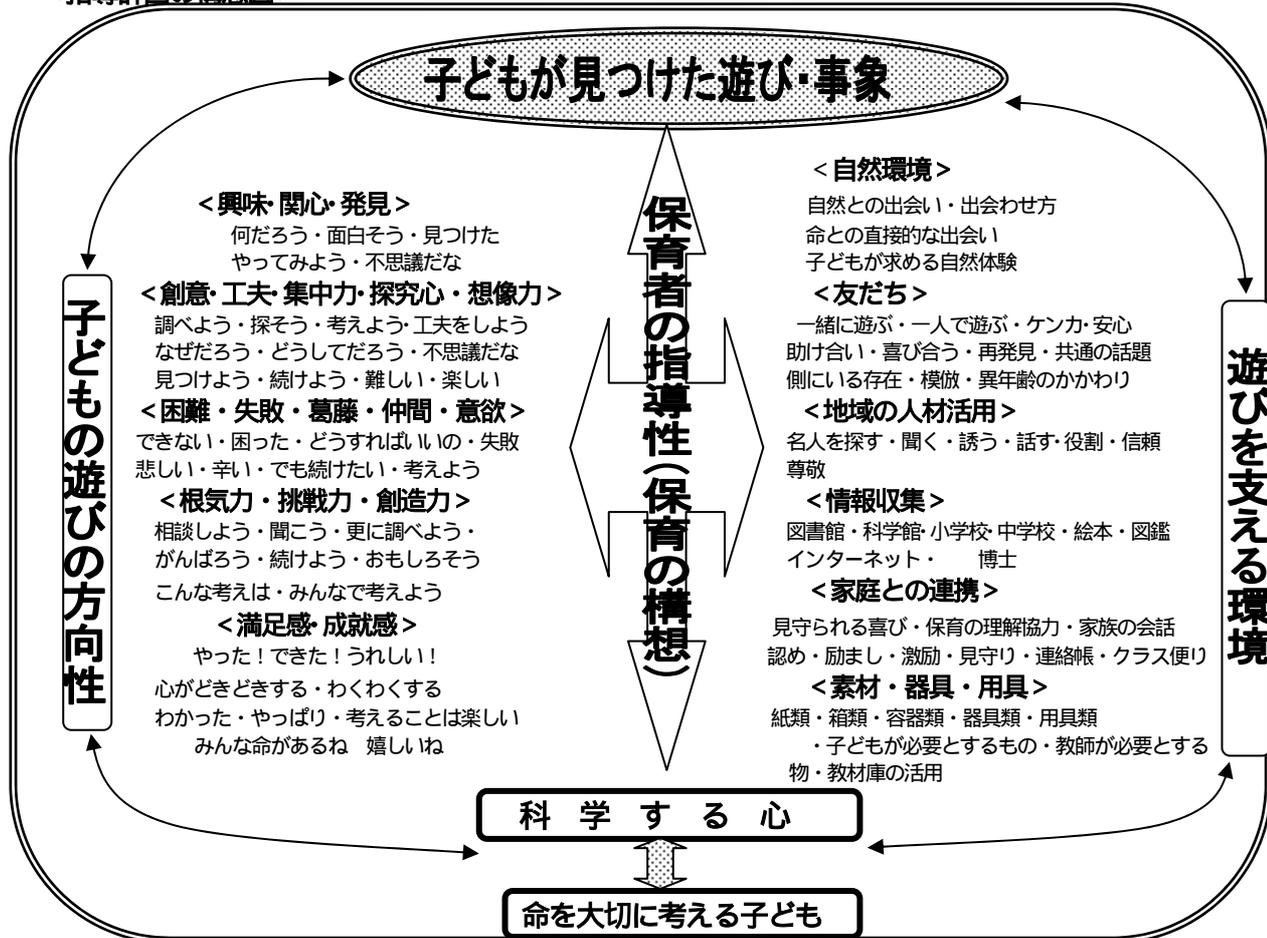
[4歳児]

<研究の目標> 子どもと保育者が共に活動をする中で、考え工夫したり、試したり、調べたりする活動に価値を見だし、全てのものに『命』があることを感じながら、生き生きと生活できるための保育を追究していく。

<研究の内容と方法> (1)子どもの「興味関心」遊びにおける「創意工夫」「集中力・探究心・想像力(創造)」「意欲 挑戦力」。子どもが遊びにもつ「満足感・成就感」について記録考察をする。  
 (2)「命」(科学する心)の大切さを育てるための保育者の指導性(援助)を工夫する。  
 意欲・興味・関心への意欲づけ・見守り・支え・発問と応答  
 (3)遊びを支えるための環境について工夫をする。  
 「命」に直接出会える体験の重視  
 発達に応じた出会わせ方の工夫



<指導計画の構想図>



## 事例1 イチゴの種 (4月中旬)

(3歳時の12月:いただいたイチゴの苗を自分たちで植えたいと主張し、寒い中で苗植えをする。) デザートのイチゴを食べたことをきっかけに、それまでイチゴの本や図鑑で知っていたことが話題になり、イチゴの種を採り育てることになる。カップにティッシュペーパーを敷いて種を並べ、少し水を入れる。「いろいろな種の色があるよ」と言う。<水分が少し多いように思われるが、保育者は見守る> 翌日、「種どうなっているかな?昨日といっしょだ」と言っている子どもに、保育者が「どうしたら芽が出るのかな?」と訊ねると、「お日様があたらんといけん」と言い、種の入ったカップをテラスに置く。種の入ったカップを保育室に入れる。保育者が「どうして、持って入るの?」と訊ねると、「だって...寒いでしょ」と答える。「寒いとどうなるの?」と保育者が言うと、「出ようとした芽が中に戻ってしまうんだよ」と言う。カップの種にカビが生えているのも見つける。「カビが生えた種を別にしよう」と友達に言う。友達は「カビが生えたらダメだね。死んだの?」と言い、「そう...カビが生えた種からは芽が出ないから...」と寂しそうに言う。そこで「土がいいんじゃない?」「土から芽が出るよ」と言う子どもは、カップに土を入れて種を乗せる。

### 事例2 イチゴを食べる（5月中旬）

赤くなったイチゴを見つける。見つけたことを喜んだり歌ったりして見ていると、ポロッと落ちてしまう。見つけた子どもだけでなく、みんなで分けて食べる。

赤くなったイチゴを収穫する。数を数えたり量ったりする。クラスの友達や保育者みんなで分けて食べる。



### 事例3 イチゴができない（6月上旬）

「朝見たら、イチゴがなかったよ！」と言う子どもに、保育者は「本当はないね。そろそろ終わりかな？」と言い、友達は「また、肥料あげたら？」と言う。すると、「イチゴのお兄さんが話しとらいだが..終わりだって。次の赤ちゃんを育てるって」と一人が言う。みんな無言になる。

畑に行くが、イチゴはできていない。花も咲いていない。「やっぱりできていない」「どうしよう...」

保育者が「赤ちゃんいるよ！」と見つけたランナーを子どもたちに伝える。子どもたちは本で知っていたこともあり、そのことを思い出して「かわいいね」「小さいね」「本にランナーを植えるって書いてあった」と言う。ランナーを切り取って、プランターに植える。

### 事例4 早かった（6月中旬）

「枯れたよ！ランナー」と言う友達の言葉を聞いて、みんなで見に行く。「本当だ」「どうしよう」「年長さんになったら、また食べられると思ったのに...」と口々に言う。

イチゴに詳しいお母さんにイチゴの話聞く。

- ・ お母さん（元の苗）にたくさん栄養をあげると子どものランナーは元気になる。
- ・ ランナーの葉が6～7枚になったらプランターに植え替える。
- ・ イチゴのブツブツは種で、全部とって水に入れると、浮く種と沈む種がある。その沈む種は栄養がいっぱいあるから芽が出やすい。

話を聞いて、「枯れてしまったが、お水あげてるのに。まだ赤ちゃんだったんだ。お母さんから離すといいんかった」「早かったか～」と話し合う。

「畑に行こう」と言う子どもの言葉で、みんな畑に行く。誰とはなくみんなジョウロを持ち「お母さんから子どもが出てよ。かわいいね」「お母さんにお水あげないと」などと言い、水をあげる。



#### 【考察】

- ・ 3歳児の時から「はと組になったらイチゴが食べられる」と楽しみにしていたが、本気で4歳にまで意識が続くとは思わなかった。それぞれの発達段階で保育を進めるからこそ、ここまで意識がつながり、考え、工夫しながらイチゴとのかかわりを深めていったのではないだろうか。
- ・ 保護者との連携も、イチゴを育てていたお母さんが声をかけてくださった。そのことは、お互いにイチゴが好きでイチゴを愛するからこそ連携ができたと思う。クラスは違う親だがクラスを超えた連携に意味があると思う。子どもたちにイチゴの命についてつなげていただき、保育者もよりよい知識を得ることができた。
- ・ イチゴの収穫が終わっても、毎日水やり畑に行く。この根気は4歳児の発達から本当にもてるものだろうかと思いたくなる。しかし、子どもたちは、毎日水やりに行くのである。お母さんに話してもらったイチゴのお話は強烈に子どもの心に根付いていると思う。子どもの心にどのような種を植え付けていくか、科学する心育で尽きるように思う。私たち保育者は、本気でこの大切な幼児教育に取り組みなければという思いでいっぱいになった。

#### みどころ

園で育てている身近なイチゴにも、そのイチゴの絵本や図鑑にも興味をもってよく見ているので、絵本から得た情報を試してみようとしたりイチゴの生長を予想し期待して世話をしたりする姿につながっています。また、興味をもち一緒に大事に育てている友達や先生（仲間）のことがわかるので、収穫するイチゴは当然のようにみんなで分け合っています。こうして熱心にかかわっているため、イチゴのランナーにも興味をもち、4歳児らしいイメージや擬人化をし、親しみをもって栽培を楽しむことができます。